

## 献 辞

富田光彦教授が、平成14年3月末日をもって滋賀大学を定年退官されることになりました。30余年の永きにわたって学生教育はもとより、研究面で立派な業績をあげられ、さらに大学・学部の改革と発展に先頭に立って貢献されてこられたことに対し、われわれは満腹の思いで感謝するとともに、また先生が本学を去られますことに強い惜別の念を禁じ得ません。

富田先生は、昭和12年に滋賀県木之本町で生を受け、地元の小中学校で学びました。小学生のころには研究発表会で何度も入賞し、中学2、3年時には郡の中学生英語弁論大会で1、2位に入賞されるなど、すでに当時から語学力と研究心を備えてグローバルに活躍される将来のお姿がしのばれる方でした。高校は、東京の早稲田大学高等学院に入学され、昭和31年4月に早稲田大学第一政治経済学部経済学科に入学されました。高校・大学在学中は、特待生として大隈奨学資金を受けておられます。

大学卒業後は、伊藤忠商事に入社し、在職中にアメリカ連邦政府のEAST-WEST CENTERの試験に合格し、奨学金を得て、昭和37年にハワイ大学大学院に留学されました。昭和38年には4か月間ハーバード大学大学院にも留学され、昭和40年2月にハワイ大学大学院でM.A.を取得されました。日本帰国後は、伊藤忠商事の外国部で活躍され、また政府や経済界の豪州・ニューギニア方面の経済視察団の団員や随員としてのお仕事にも何度か従事されました。

富田先生が本学部の講師のかたちで故郷にもどってこられたのは昭和46年のことです。先生は、昭和51年10月助教授、昭和63年11月教授に昇進されました。大学人となられてからの活躍、業績は、到底この場で紹介できないほど多彩であります。

特徴的な部分に絞って申し上げますと、第1は、主として国際経営分野の国際学会やシンポジウムの報告者、シンポジスト、海外調査団のメンバーとして活躍される一方、多数の論文を執筆されました。先生の研究業績は、著書『英和解説 変容する国際金融』（毎日新聞社、1976年）、共著『MicronesiaとMelanesia—社会経済構造と政治動向—』（アジア太平洋研究会、1977年）、論文は62編（う

ち英文29編)に及んでいます。主要な論文に、“Japanese-Style Middle Management Models in Global Perspective”, in Noritake Kobayashi ed., *Management: A Global Perspective*, The Japan Times (1997)などがございます。先生の多方面なお仕事のうち主要な業績を一言でいえば、日本的経営の国際的適用可能性に関して先駆的な研究を進められてこられたことです。

第2は、学生教育の面での貢献です。先生は、当初経済英語のご担当で赴任されました。経済英語は4年次必修の授業科目でしたので、当時の学生は全員が卒業するために先生の厳しい指導の難関をくぐらなければなりませんでしたが、そのおかげで英語力が向上したことは、卒業生の良き思い出となっております。また本学部は昭和48年から外国人留学生を学部・大学院に受け入れてきましたが、先生はアジアを中心とした留学生の指導を積極的に引き受けられ、多くの留学生が先生の薫陶を受けて母国に帰っていきました。大学院の富田ゼミは留学生にとって最も人気のあるゼミで、それだけにその裏で先生のご負担は計り知れないものであったと思います。

第3に、先生は本学の国際交流委員をはじめ、各種の要職にお就きになりましたが、とりわけ図書館長の在任中には、本学懸案の課題であった本館問題に取り組まれました。本学は、2つの学部キャンパスが60キロメートルも離れており、図書館はそれぞれに分館があるのみで本館が存在しませんでした。この問題に決着をつけて本館設置が実現したのはひとえに図書館長富田先生のご尽力の結果に他なりません。

このたび滋賀大学経済学会は、富田先生の本学に対する多大な貢献に感謝する意味から、本号を編集し、先生に捧げることになりました。ささやかなものではありますが、われわれの尽きせぬ謝意および親愛の気持ちの一部としてお受けいただければ幸いです。

先生は、退官後は、地域社会に貢献なさる計画をお持ちと伺っておりますが、国際的な研究教育の機会も続いてしばらくはお忙しいことと思います。ご健康にはくれぐれも留意され、また今後とも変わりませずわれわれに対するご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

平成14年1月

滋賀大学経済学会長 成 瀬 龍 夫